国語解答

一 問1 A…ア B…解なし C…ア D…ウ
問2 A…ウ B…イ C…ウ D…エ
問3 A…ア B…エ C…イ D…ア
問4 A…イ B…エ
問5 A…ウ B…イ

二 問6 A…オ B…エ C…ア
問7 イ 問8 イ 問9 ア
問10 ウ 問11 エ

三 問12 ウ 問13 ア 問14 ウ
問15 エ 問16 ア 問17 エ
問18 イ 問19 ウ

四 問20 エ 問21 ア 問22 ウ
問23 ウ 問24 ア 問25 イ
問26 ウ 問27 ア

一〔国語の知識〕

問1＜漢字＞A.「寄席」は，「よせ」と読む。落語，漫才などの演芸を見せる場所。　C.「婉曲」は，「えんきょく」と読む。遠回しに穏やかに表す様子。　D.「顧みる」は，「かえり(みる)」と読む。振り返ること。

問2＜漢字＞A.「追究」は，事柄を明らかにするために深く調べていくこと。「追求」は，目的のものを追い求めること。「追及」は，責任や原因などがどこにあるのか追いつめること。「追給」は，不足分を後から支払うこと。　B.「補償」は，相手に与えた損害を金銭などでつぐなうこと。「保障」は，よそからの危害がないように責任をもって守ること。「保証」は，人物や製品について確かで間違いがないということを受け合うこと。「保償」という熟語はない。　C.「規制」は，規則に従って制限すること。「既成」は，すでにできていて行われていること。「規正」は，悪いところを正しく直すこと。「既製」は，すでに商品として作り上げられていること。　D.「施行」は，法律が実際に効力をもつようにすること。「試行」は，ためしに行うこと。「指向」は，ある決まった方向を目指して向かうこと。「施工」は，工事を行うこと。

問3＜四字熟語＞A.「疑心暗鬼」は，一度疑い始めると何でもないことにまで疑問や不安を感じ，恐ろしくなってくること。「大器晩成」は，大人物は大成するのに長い年月を要すること。「温故知新」は，古いことを研究し，新しい知識を探り当てること。「勧善懲悪」は，善行を勧めて悪人をこらしめること。　B.「一朝一夕」は「いっちょういっせき」と読み，極めてわずかな時間のこと。「馬耳東風」は，人の話を右から左へ聞き流すこと。「泰然自若」は，ゆったりと落ち着いた様子。「異口同音」は，大勢の人が口をそろえて同じことを言うこと。　C.「無我夢中」は，一つのことばかりに気を取られて我を忘れること。　D.「有為転変」は，世の中すべての現象や存在は常に移り変わるものであって，決して一定しているわけではないという仏教の言葉。「臥薪嘗胆」は，目的を達成するために大変な苦労をすること。「朝三暮四」は，目先の違いにとらわれて結局は同じであることに気づかないこと。また，口先で人をだますこと。「有象無象」は，数ばかり多いが取るに足らないつまらぬもののこと。

問4＜熟語の構成＞A.「多寡」は，反対の意味の字を重ねた熟語。「河川」「模倣」「身体」は，似た意味の漢字を重ねた熟語。　B.「厳守」は，上の漢字が下の漢字を修飾している熟語。「帰郷」「就職」「鎮痛」は，下の漢字が上の漢字の目的や対象になっている熟語。

問5＜敬語＞A. 先生は目上なので，「来る」の尊敬語「いらっしゃる」を用いるのが正しい。「参る」は「来る」の謙譲語なので，「れる」をつけるのは誤り。　B. 目上の人に対しては，「する」の

尊敬語「なさる」を用いるのが正しい。「いたす」は「する」の謙譲語。

二〔論説文の読解―哲学的分野―人間〕出典；茂木健一郎『化粧する脳』。

<本文の概要>人間にとって「実質」が大切で見かけを取りつくろってもしかたない，というのは一理ある。しかし，人間は他者とのかかわりの中で生きているので，他人が自分をどう見ているかということが，自我の成り立ちに重大な影響を与える。男性は，自我が社会的に成り立ち，「私」は他人とのかかわりの中で生まれてくるということを，概念として理解するだけだが，女性にとって「自我は社会的に構築される」という脳科学の命題は，当たり前である。女性は，化粧によって自分自身のあり方を変容させ，自分自身の外見を演出するからである。私たちにとって，他者は自己を映す鏡で，他者の視線を受け入れるかたちの化粧は，人間の社会性の象徴である。鏡は，有史以来の人類の最大の発明品の一つで，人類は鏡を手に入れることで意識の階段を一つ登った。そして，鏡の発明とともに登場した化粧によって，人類史も「化粧前」と「化粧後」に分かれる。「化粧後」の時代を生きる私たちは，鏡を見ることで他人から見られる自分を意識し，「私とは何か」という自我の問題への答えを見出すことができるのである。

問６<接続語>Ａ．この世には，本当は大切なことなのに油断してその本質を見失うことがあり，女の人の「化粧」はその一例である。　Ｂ．人間にとって大切なのは「実質」で，見かけを取りつくろってもしかたないというのは一理あるが，実際には，人は他者とのかかわりの中で生きている。Ｃ．「化粧をする」ことは，「他者から見られることを前提に，自分自身のあり方を見つめ直す」ことである。

問７<文脈>「私たちにとって他者は自己を写す鏡となる」ということは，つまり，「自分自身の心が他人の中に投影される」ということである。

問８<文学史>『三四郎』は，明治時代の夏目漱石の小説。

問９<文章内容>男性は，「自我」が社会的に成り立ち，「私」は他人とのかかわりの中で生まれてくることを，概念として理解するだけである。これに対し，女性は「化粧」することで自分自身の外見を「演出」するという実体験によって，「自我」を理解する。

問10<文章内容>「地球の出」の写真によって，人類は，自分たちの住む地球が「奇跡のように美しい青い惑星」であると初めて知ることができた。人類は，人が鏡で自分の顔を見るように，撮影された写真を鏡として使うことで，自分たちの住む地球を自分たちの目で見ることができた。

問11<文章内容>「自我」は「他人が自分をどう見ているかということ」に影響されて形成される社会的なものである。鏡をもつようになった私たちは，鏡によって「他者から見られる」自分を意識できるので，「『私とは何か』という『自我』」についてより深く考えることもできる。

三〔小説の読解〕出典；江國香織『子供たちの晩餐』（『つめたいよるに』所収）。

問12<文章内容>豊がいつもとは違い「愛想よくこたえる」態度は，まるで「胸にイチモツありますって告白してるみたい」で不自然だったので，理穂は，親が怪しむのではないかと気をもんだ。

問13<文章内容>「宿題もちゃんとやるのよ」と言われた豊の「うん。わかってるよ」という返事がいつになく従順で，母親は少し意外な感じがした。

問14<表現>理穂は，いつもとは違う受け答えをした豊に対して，それでは計画がばれてしまうということを伝えようとして，言葉を使わずに目配せした。

問15<心情>両親は，ほかの兄弟にいろいろな注意を与えたが，詩穂には何も言いつけることなく，逆に兄や姉に「詩穂ちゃんを泣かせちゃだめよ」と注意した。「まだたったの四歳」で「何といっても末っ子」の詩穂は，このような「特別扱い」を受ける自分が少し誇らしいのである。

問16<心情>間食してはいけないという言いつけを破ることなど，羽目を外して好きな物を食べるというこれからの大それた計画に比べれば，大した規則違反ではない，と理穂は思った。

問17<心情>四人のために用意されていたのは「いつも完璧」なママの料理だったが，四人はこれから好きな食べ物を「好きな場所で，好きなだけ」食べたいがために，それを捨てた。

問18<表現>理穂たちは，ふだんは体のことを考えてきちんと管理された食事しか食べさせてもらえない。だから理穂は，初めて食べる「身体に悪そう」な食べ物の数々に非常に心を奪われている。

問19<文章内容>両親が帰って来るときには何事もなく，きちんと留守番していたかのように振る舞わなくてはいけない。笑っていたりしたら，何か特別なことをしたのがばれてしまう。

四〔古文の読解―説話〕出典；『古今著聞集』巻第八，三一一。

<現代語訳>昔，元正天皇のご治世，美濃の国に貧しく身分が低い男がいた。年を取った父がいたが，この男は，山の草木を取って，その代価を得て父を養っていた。この父は，朝夕むしょうに酒を好み，欲しがったので，（男は）ひょうたんを腰につけて，酒を売る家に出向いて，いつでも酒を求めて父を養った。あるとき，（男が）山に入って，たきぎを取ろうとすると，こけが深い石で滑って，うつぶせに転んだところ，酒の香りがしたので，思いがけなく不思議に思って，その辺りを見ると，石の中から水が流れ出ている所がある。その色が酒に似ていたので，くんでなめてみると，すばらしい酒である。うれしく思って，その後，日々これをくんで思う存分に父を養った。

ちょうどそのとき，元正天皇がこのことをお聞きになって，七一七年九月，その場所へお出かけになって，ご覧になった。これはつまり（男の）孝養ぶりのために，天上界の神と地上の神があわれんで，そのお恵みを示したのだと（天皇は）感心なさって，（男を）美濃の国の長官になさった。（男の）家は豊かになって，ますます（男の）孝養の心は深くなった。（天皇は）その酒の出た所を養老の滝とお名づけになった。これによって，同じ年の十一月に，年号を養老と改められたということである。

問20<古語>「あたひ」とは，代金のこと。

問21<古文の内容理解>２．男は，父親のために，酒を売る家に出向き，酒を買っていた。　４．男は，山で石の中から酒が流れ出ているのを発見して，うれしく思った。

問22<古文の内容理解>男は，酒が好きな父のために酒を売る家に行き，常に酒を求めていた。

問23<古語>「飽くまで」は，満ち足りるまで，満足するまで，という意味。

問24<古文の内容理解>元正天皇は，酒の泉を発見した孝行な息子にちなんで，酒の出た所を養老の滝とお名づけになり，十一月には年号を「養老」とお改めになった。

問25<古典の知識>月の異名は，一月から順に，「睦月（むつき），如月（きさらぎ），弥生（やよい），卯月（うづき），皐月（さつき），水無月（みなづき），文月（ふづき），葉月（はづき），長月（ながつき），神無月（かんなづき），霜月（しもつき），師走（しわす）」である。

問26<古文の内容理解>昔，貧しい男がいて，山の草木を取って売った金で年取った父を養っていた（イ…○）。あるとき，山に入って転んだ男は，石の中から酒がわき出ているのを見つけ（ウ…×），その後は毎日これをくんで父を養った。このことを天皇がお聞きになり，酒がわき出たのは男の孝養のおかげだと感心なさって，男を美濃の国の長官になさった（ア…○）。男の家は豊かになったが，男の孝養の心はますます深くなった（エ…○）。

問27<文学史>『古今著聞集』は，鎌倉時代の説話集。『徒然草』は，鎌倉時代の兼好法師の随筆。『源氏物語』は，平安時代の紫式部のつくり物語。『竹取物語』は，平安時代の伝奇物語。『おくのほそ道』は，江戸時代の松尾芭蕉の俳諧紀行文。